

授業づくりをこうマネジメントする

連載(第9回)

関西外国語大学

中嶋洋一



「感動・憧れ・誇り」を育てる

教師の指導が伝わるかどうかは子どもがそれをどう捉えるかにかかっている。「甘い教師」と「冷たい教師」からは、子どもたちの心が離れていきやすい。では、「優しい」と「甘い」の境目、「厳しい」と「冷たい」の境目の基準は何だろうか。

「優しい」教師は、自分のことを考えてくれる、自分のために手間隙かけてくれるということを理解している。一方で「甘い」教師は、信念が弱く、ゴールや判断基準が曖昧で、朝令暮改も多い。子どもたちが混乱する。

「厳しい」教師は、優しさばかりでは、やがて依存するようになることを知っている。ゴールを意識させ、ぶれさせない。しかし、その厳しさの中にも相手を気遣う心のゆとりがある。だから、子ども

もたちは厳しい指導にも納得する。一方、「冷たい」教師は、指導に「心」がなく、目の前のことや体裁(自分の立場)を優先しようとする。言うまでもないが、子どもたちに信頼されるのは、「優しさ(温かさ)」と「厳しさ」の幅が広い教師である。

指導力を高める次の要素は同僚性である。ジグソーパズルの完成図を最初に共有しあうことである。

たとえば、異動したときについて前任校と比べてため息をついたという経験は誰もがもっているだろう。人間は「習慣の動物」であり、慣れ親しんだものとは違う状況を受け入れるには通常時間がかかる。吉田先生も、異動の度にカルチャーショックを受けてきた。しかし、彼女は現状をなんとかしようとして立ち上がった。友呂岐中

でもそうだった。彼女が仕掛けたのは体育大会の創作ダンスである。だが、最初の練習に来たのはたった三人。そのうちの一人は金髪に近い茶髪、あとは三〇分しか練習に参加できない水泳部の一人といった感じだ。前任校では、朝七時からの学年練習でも女子全員が集まる程の勢いがあったため、そのギャップに大きなショックを受ける。

それでも、彼女は諦めない。やがて参加した生徒が少しずつダンスの魅力を感じ、仲間に呼びかける。どんどん輪が広がり、ダンス一期生の活動が軌道に乗り始める。結果、体育大会の創作ダンスは大成功する。彼女の脳裏には、心が荒れていた子どもたちのはじけるような笑顔と泣き顔が焼き付けられた。

たまたま朝礼台の後ろに茶髪に

「感動・憧れ・誇り」を大切にしたい教育が荒れを克服する

—12月の問題提起を読み解くために—

鼻ピアス、派手な格好の若者たちが来ていた。話の内容から、今年の春卒業した生徒たちのようだった。

「あの子たちすごいなあ。なんかきらきらしてる」

「うん。私たちの時もこんなやりたかったな」

「俺も真面目にしとつたらよかつたわ」

「もう一回友中に戻りたいね…」
この声を聞いて彼女は決心する。これから出会う子どもたちには「友中でよかったと思わせてやりたい」「たとえ厳しいと言われようとも、教師がこだわり、自分にとって最高のレベルをめざさせよう」と。

彼女は言う。

「私一人では何もできません。決して自分一人で目の前の生徒を何とかしようと思わないこと

です。両親の不和が子どもの心を荒れさせるのと同じように、教師集団の仲のよさや笑顔は子どもたちの健やかな成長には欠かせません。

たとえば、本校ではリーダー会議、班長会議を位置づけています。クラスの班長は自分たちで決めます。この時、担任も参加します。子どもたちのつばやきをしっかりと

と拾います。学年集会の進行も生徒です。出来る限り生徒の演技、作文や呼びかけなど発表の場を与えています。教師も、伝えたいことは指示だけでなく寸劇で演じるようにしています。寸劇を堂々と演じるには、教師のノリのよさやユーモアが必要です。

教師は、瞬発力と持久力の両方を持ち合わせていることが大事だと思います。瞬時にその場の空気を感じ取り、生徒との距離感や立

ち位置、適した場所、声かけのタイミングや口調、強弱、速度等を見極めることです。押したり引いたりもします。

持久力というのは、あきらめず、少し距離をとったふりをして、目を離さないことです。そして、チャンスがあればタイミングよくとっておきの一言をかけてやりま

す。
人は人と関わって気付き、変容し、成長していくのだと思います。私も、初任の時先輩に言われた『想いを込めて育てた樹には美しい花が咲く』という言葉がすべての土台になっています」

人は環境で育つ。組織が人を育てるのである。質の高い教育を目指すし、自分がみんなのために動くことを厭わない。教師集団が本気なら、子どもたちも必ずそれを感